

房後連絡協議会結成の経緯と 発足の趣旨

房後地域の概要

房後地域は高宮町の東部に位置し、甲田町稼地及び深瀬に接する。東西が約4km弱、南北が凡そ2.5km、面積は約8km²である。集落は、稼地方面から流れ出て山田川や仁王丸川、新迫川、楨細川、粒原川などを集めて生田川に注ぐ房後川の谷間に形成されている。生田川合流点あたりの標高が約220mで、最高は東北の船木との境界に所在する海拔416mの主峯「鉄穴」(てっけつ)で、標高差200mとなっているが、家々の大多数は、その主峯から西と南に向かって下る谷間に散在している。なお、房後地域の南部は、標高差20~30mの「高宮丘陵」に属していて比較的平坦な地形なので、東西に中国自動車道が貫き、広大なリージャスクレストゴルフ場の用地ともなっている。

房後という地名の由来、起源については不明であるが、房戸などの古代の用字例からも相当に古くから開けたものと類推される。古墳は郡内唯一の前方後円墳である白鳥古墳を始め約30基もある。その前の時期の弥生土器も新迫南遺跡や勘部宮本宅裏から出土しているので、この地に農耕のため定住して生活するようになってから、2000年以上の歴史をもつものと思われる。房後の地名を示す最古の文書は、慶長6(1601)年の房後村検地帖(新迫京極家旧蔵)で、その後明治22(1889)年の船佐村合併に至るまでの約300年間「房後村」として暮らしてきたことになる。この検地帖には戸数や人口の記載はないが、100年後の18世紀初頭で121戸の389人、19世紀になっては105戸の405人という記録があるので、明治の合併ごろも凡そ100戸、400人前後を推移していたものと思われる。この数字は現在にも受け継がれて来ていて、高齢化や少子化、さらに過疎化で人口こそ減ったものの、戸数は100戸前後を維持している。

麦の会の結成とそのあゆみ

麦の会は昭和47(1972)年暮れごろから結成の話が出て話し合いの結果翌48(1973)年に、房後地区に住む主として20代30代の若い男性を中心に、約40名の会員によって結成されたものである。当時は米の減反政策が始まって3年目で、過疎化も一段と進行していた。その上、この年の夏にはいわゆる47年災害という大水害もあったし、また一方では中国縦貫自動車道が房後地域を東西に貫くことが決定し、それに自動車道の南側の房後地域の四分の一を占める山林にゴルフ場造成の話がもち上がり、業者側と折衝に入る段階となっていた。房後の将来像についての大きな展望が開ける一方、それに伴う将来への不安も交錯するという複雑な状況下にあった。

もっとも若い人としては、このような難しい状況の認識ということよりも、同じ地域に住みながらも自分の仕事が精一杯で、顔を会わすことも挨拶を交わすこともないという現実から、時には集まって語り合う機会を持つとの願いのもとに結成された。麦の会の「麦」は、踏まれれば踏まれるほど力強く成長する麦の生命力にあやかっただけの命名であった。事務所兼集会所は、当時の勘部集会所、後にはその近くの楨原年明会員所有の作業所二階とし、房後老人集会所が出来てからはここを活動拠点とした。高下春人会長(当時40才)を選び、規約も堅苦しいものでなく、ただ房後地域に住む青壮年をもって構成することと、地域の振興と会員相互の親睦を図ることを目的とした。そして当面は、「一年に一仕事」を目標に、この地に残るものを、活動としてやっつけようということになった。まず手始めに、休日を使って、地域の懸案でもあった石田山神社の境内整備として、サツキの植えこみ作業に取り組んだ。その後も年々、社殿横の社有林にヒノキの植林をするなどの奉仕活動を行った。さらに、昭和53(1978)年石田山神社の古い神輿と同じ形のヒノキ造りの神輿をこれも夜なべ仕事として完成、以後秋祭りには

この神輿を会員が担いでお旅所へ巡行するのが慣例となった。昭和50(1975)年には、房後出身者の縁故によって広島機関区から払い下げられたDC51機関車の動輪を、記念碑として多くの会員にとっての母校である船佐小学校の校庭に建てた。麦の会結成の翌年の夏には、16年ぶりに盆踊りを復活させた。当初は寺で行われていたが交通便、駐車場等の関係から場所を石田山神社境内に移し、「房後納涼祭」として今日まで続けられていて、すでに21回を数える。

房後連絡協議会の発足

昭和56(1981)年ごろから高宮町の施策としてコミュニティ(地域振興会)づくりが取り上げられるようになったが、当初房後地域としては、ここ十年來地域振興を目指して活動している「麦の会」こそ、その組織に相当するものと考えられていた。事実、同年8月30日の中国新聞のシリーズ記事『流域を行く』に「房後川…地域の連帯を培う」と題してこの麦の会の活動を大々的に報道されたこともあった。それで“房後地域は、麦の会の活動で充分だ”という雰囲気であった。しかし、コミュニティの活動は、コミュニティの全住民が参加する活動であるべきだという観点から見ると、青壮年の男性ばかりの組織で、加入脱退は自由という麦の会だけでは、全住民の参加とはならないし、住民自治の精神にもそぐわない。そこで、房後地域内で既に組織され活動している婦人会(現女性会)老人会、消防団、子ども会等の他、新たにどの団体にも加入していない男子中高年層で新たに「親睦会」という団体を結成し、これら団体役員と、そのいずれの団体にも属さない住民の代表として行政区長の参加を求めて「房後連絡協議会」を結成することになるのである。発足の日時は、正式の記録は見当たらないが当時の役員の日記によれば、親睦会結成直後の昭和57(1982)年6月16日夜、各団体の役員と役場担当者が出席して、地域振興会を発足させることを一同で確認している。

かくして、房後連絡協議会は「房後地区の振興と住民相互の親睦を図る」ことを目的として結成された。活動の拠点施設には、当時建設されたばかりの房後老人集会所を充てることとし、会長と事務局長には当面、従来からの活動実績も顕著な麦の会から選出することとした。

房後連絡協議会と加入団体の活動

房後連絡協議会の結成によって、房後の全住民が参加する活動は連絡協議会が主体で執り行い、加盟団体はそれぞれが自主的に活動を展開することになる。それに地域内の伝統的な宗教的行事は、住民の任意に基づきながら可能な限り協力をしてきた。次ページ以降に年次別のそれらの諸活動が記録してある。

ところで、房後連絡協議会の活動には、年々の恒例となっているものが多い。納涼祭、運動会、敬老会、収穫祭、地域振興懇談会などの諸行事を精力的に取り組んできた。その他に、地域内のことを知ってもらうための広報活動として、毎月一回、B4サイズのワープロ製版『明るい房後』を発行してきた。

加盟団体では、従来から中心的役割を果たしてきた麦の会が、その後も独自の活動に取り組んだ。房後女性会でも芸能やボランティアに特色のある活動をしているし、近年では福祉面でも高齢者の期待は大きい。老人会は、一時期、生産活動やゲートボールで他地域からも注目されるほどの活動をした。また、子ども会の海水浴やさかなのつかみどりなど、ユニークで夢のある活動も記録に残る。大崎上島の大崎町本郷地区との姉妹地区縁組もめずらしい取り組みで、お互いの活動に役立ち、参考になることが多い。

このようなさまざまな活動を経て、発足以来20年目の今日を迎えるに至っているのである。今後も加入団体の自主性を尊重しながら、互いに連絡・協調した活動を営まねばならない。